

昭和二十四年七月二十三日 第三種郵便物認可  
 昭和五十七年十二月十五日 発行 (毎月一回・十五日発行)

(通第四〇一号)

# 慈光

第三十四卷 第十二号

## 次

信 仰 問 題 …………… 近角常観 …………… (1)

降 魔 と 成 道 …………… 福島政雄 …………… (4)

念 仏 の 信 …………… 井上善右エ門 …………… (8)

凡 骨 日 誌 抄 …………… 西元宗助 …………… (11)

② 人間が人間になるために …………… 東昇 …………… (14)

念 仏 詩 抄 …………… 木村無相 …………… (19)

大無量寿経に聞く …………… 花田正夫 …………… (22)

## 目

↑星の王子さま

# 信 仰 問 題

近 角 常 觀

我が身の罪を苦にする人に

「何程聞いても五分五分根性が止まらぬ」とて、五分五分根性より脱する能わざるにもだえて居らるる方がある。

「聴く間はよいが、家に帰ると、忽ち五分五分根性が頭をもたげて来る」といつて歎かれる人がある。これらのお方に聞いてもらいたいことは、

信仰は何も五分五分根性を止めよとのことではないことである。如来のお慈悲は、腹の立つのを改めよとの仰せではないことである。否、その五分五分の如何につとめても止まらぬことに、無限の同情を持って下さるのが如来である。無限の真実心をそそいで下さるのが如来である。

とかく私共は、自分の心がいかぬということに目がつくと、それを直したいところが先になって、それに向つての真実な同情をもたれた仰せの方は、耳に入らぬという傾向がある。むしろ問題は、自分の心の直る直らぬに在るので

はない。どうしても直らぬ悪心に向つて、飽くまで同情し、飽くまで悲愍をそそいで下さる大悲、真実の仰せの方にある。

試みに考えて見るがよい。自分ながら愛想の尽き果てた、醜悪見るに忍びざる私共の心である。すでに自分ながら愛想がつきている身に、如来は飽くまでこの身を醜悪とされないばかりでなく、そうした心の故に離れて去るに忍びぬとの仰せである。自分すらイヤでたまらぬ心を、如来は飽くまでイヤと捨てたまわぬということは、唯言葉で言えばそれまでであるけれども、よくよく考えて見れば、軽いことではない。唯口先きで、如来はそう言うて下さるのだと思っただけであつてはならぬ。

この醜悪な私に向つて、如来の方よりは、かくしてまでも近づき、立ち入らずに居られぬとある如来の御真実の方に目をつけなくてはならぬ。そも／＼如来は何の故にかくまで我を慈愛し給わねばならぬのであろう。かくまで優し

く仰言つて下さらねばならぬのであろう。それが即ち本願不思議の親心である。大悲矜哀の御真実にてまします。「かえす／＼も問題は、自分の悪の止まぬ点にあるのでない。止め得ない悪のために疾くより呼びかけ、待ちかねさせ給える本願不思議の招換の方に在るのである。この心は奥まで御真実の心である。御真実の心である。御真実の心である。」

## 簡明なる信仰

信仰は至つて簡明なるものである。内面的に、また外面的に、悪業に繫縛せられて、一分一厘の自由無き我等と、その我等を引き受けて、何処までも重担として下さる大悲の御真実と、唯それだけである。

絶対不自由の我等、ひとたび広大なる御真実に引き受けられまいらせて見れば、最早やその中間に何等の問題もあるべきでない、何等の疑惧もあるべきでない。唯南無阿彌陀仏である、唯御真実ひとつである。

初めてあらゆるはからいより放たれて、自然の偉大なる御はからいにはからわれまいらせて、あるべきように身を処して、歩々大悲の真実に呼吸して世に生きる。

かくてこそ人生の相對に膠着して、離れ難かつた身も心も、いとかる／＼と、初めて實際生活においても「やれるだけは、やらせてもらえる」心の余裕を得させてもらわれ

るのである。若しこの外に「こうわかつた」の、「ああいただいた」の、「こうあるべき」の、「あ、あるべき」と、一点はからいの介在する余地あらば、それはむしろ大いに警戒すべきであらう。信心は何か複雑、玄妙な思想を経験することと思つて居たら、むしろ我等の複雑を如来にうばわれて、南無阿彌陀仏の一つにさせられてしまふことであつた。唯感謝の単一な生活にさせられてしまふことであつた。南無阿彌陀仏、タタタ。

## 親鸞聖人渴仰の氣運

近時（大正十年）聖人渴仰の氣運が社会に勃興するに至りたるは、大いに喜ぶべきことであるが、聖人の真面目を得たるもの少きは残念である。勿論見方によりては、ともかく諸方面より聖人を渴仰することなれば、むしろ大同をとりて小異を問わず、一世の氣運を傾倒すべしと云うことも出来る。如何にも一種の運動として見れば、むしろかくすることが得策であるかも知れぬ。

しかし聖人は法然聖人門下に三百八十余人の念仏者を打つて一団として、浄土門の氣運を張ろうとは仰せられなんだ。むしろ恩師の真面目を得たる者、僅かに五六輩に足らざることを警告せんがために、信行両座を分かつたので

はないか。真に聖人の門侶たらんものは、聖人の一点の妥協を許されぬこの真面目を仰がねばならぬ。

現代の聖人を渴仰するものは、聖人が人のために忍受せられた行跡を理想として、これをたどり行わんとする趣がある。これ畢竟聖人をはきちがえて、自力修善の陥穽におちいりたるものである。古来妙好人を理想として、同様の誤りに墮ちるものがある。聖人を如来の権化として、我等がその絶対の慈悲に浴するならば、まことに結構なれど、聖人を理想として忍受を實行せんとするものは、現代式に行不退をくりかえすものである。二百八十余人が法然聖人を理想として、自力念仏におちいりたものと同様な誤りにおちたものといわねばならぬ。

この如き理想的追求は、絶対になし遂げ得ざることは明らかなる道理である。この種の理想家は、この点においては、大胆にも、或程度で打切ることが頗る平気である。而してその口実に罪惡煩惱を持ち出すのである。しかも或程度までの理想実行は、堅く握って捨てぬのである。而してその程度は、各自随意勝手に、出来るだけということになり、出来ぬ点は凡夫であるから致し方がないという、甚だしきに至っては許して頂くといい。ここに自力作善の理想主義は、極端なる放縱主義、自然主義と妥協するに至るのである。これ現代他人のために働くことを理想とする人が

## 降魔と成道

降魔と成道という場面は釈尊伝中の最も興味深き場面である。降魔は煩惱の統一であり、成道は仏界の内観である。多くの仏伝が説く降魔の物語は戦の物語であるが、それは兩々相對陣して戦うというような戦争物語ではなく、悪魔は戦斗準備をして菩薩に向って押し寄せるのに、菩薩は、静寂裡にこれと問答するばかりで、菩薩の態度はあくまでも消極的である。悪魔に対して武器を執って應戦しようとするような態度は微塵もない。しかも悪魔は敗れて退き、菩薩は静かに菩提樹下を勝利の座として仏陀の大覺に徹する。この菩薩の態度は努力奮闘というような態度ではなく、静観精進という態度である。

悪魔は自己自身に激して猛り狂う。菩薩は静かにその猛り狂う悪魔のすがたを観する。しかし外から迫り来る悪魔は、実は菩薩の心中の悪魔である。菩薩には心中の苦惱が打ち続くのである。この時、悪魔は必ずしも悪魔のすがたをもつて現れて来ない。

自己の生活について無責任に陥り易い所以である。

ここにおいて或者は聖人の名の下に極端な放縱自然の生活を是認し、聖人の真面目を得たるかの如き思想上の陥穽に墮する様になる。これ我等の惡業煩惱の氷の儘に存在を許して、未だその氷を融かしむる無碍光の絶対の慈悲に浴せない誤りである。勿論言葉として、慈悲を繰返しているのである。然し唯罪惡の存在を是認するのみにして、罪惡を融かしむる無碍の大悲に温められぬのである。罪惡の儘といえることは、罪惡自身の氷塊からは、一点の微温も出て来ぬことを意味するのは勿論であるが、それ程の氷塊も碍ぐることも能わざる仏日の照耀のために、氷塊の中心まで慈光徹到して、罪惡の最後まで消滅されることを忘れてはならぬ。御文に「されば無始よりこのかたつくりとつくる惡業煩惱を、願力不思議をもって消滅するいわれあるがゆえに、正定聚不退の位に住すと成り。これによりて煩惱を断せずして涅槃を得といえるはこのころなり」とあるが、実にこの積極的な信仰の実現である。上記の歎異抄と対照して、不断煩惱得涅槃の両面を味わうべきである。

聖人の名の世に渴仰せらるるだけ、吾人は益々聖人の真面目の渴仰に力をいたさねばならぬ。

大正十年「求道」より抄出

## 福島政雄

人生において悪魔が悪魔として見えるということは容易なことではない。煩惱は必ずしも煩惱として感ぜられないのちは輝き人生は希望に満つると感じて居る。今菩薩がまさに成道しようとする時においても、菩薩の過去の様々のいのちの姿が現れて来る。染愛・能悦人・可愛樂の三女というのも、まさに此の如きものであろう。三女が若き美しき女性の姿において現れて居る限りにおいて、煩惱魔が煩惱魔であるとは感ぜられない。それは可愛樂ともて感ぜられるのである。それは所謂天上の喜樂の心境である。感覺や本能の無自覺的享樂の状態である。その時においては、この世に悪魔は存在しない。女性はことごとく染愛であり、能悦人、可愛樂であり、男性はことごとく名譽や權勢や轉輪聖王の憧憬者であり、刺戟者であり、同伴者である。

併し今や降魔の場面における菩薩は悪魔を見たのである。人生は久しき以前より菩薩にとつては苦惱の道場であった。生命の姿は煩惱魔の跳梁のすがたがあり、此の煩惱魔を避

くべきか、或はまたこれと戦うべきかは、菩薩の数年にわたる問題であった。菩薩は先ずこれを避ける道を探った。太子の出城は即ちこれである。次にこれと戦う道を探った。苦行林における修行の如きは即ちこれである。しかもこれを避けて避けることが出来ず、これと戦つてこれを征服し得べきものでないということが、菩薩の体験上の結論である。併し苦行林の修行の如きは、かつては悪魔でないと思つた煩惱魔の正体をいよいよ明かにするという意味であつたであろう。故に悪魔は今やその全相をもつて、菩薩の眼前に現るに至つたのである。

悪魔が大軍をもつて金剛菩提樹下の菩薩の道場に押し寄せて来たとき、諸天は怖れて姿を隠したという。これはまた非常に意味深いことである。諸天の世界は喜樂の世界である。喜樂の対象は甘美なるものであるが、甘味の一面は苦醜である。喜樂はそれが無自覚であればあるほど、忽ち転じて苦惱となる。菩薩の心眼に悪魔が悪魔としてその姿を現すとき、喜樂は菩薩より去る。否むしろ喜樂の諸天の姿が忽ち転じて悪魔となるのである。

今や悪魔の世界は虚空から地上までひろがつて来た。悪魔はその様々の醜き姿を菩薩の眼前に呈露した。その頭に大樹をいただき、手に金杵を執るものは、惟うに權勢と黄金との誘惑である。大腹長身なるは餓饑貪欲の姿である。

法降寺の金甕に安置せらるる四天王の像を仰ぐとき、吾人はこの天魔一如の姿を見る。魔は服して四天王の足下にあるが、反抗の揚句に征服せられたという面貌は毫末もなく、温順なる家畜の如く四天王の足下に戯るるが如き趣があり、これを鎌倉時代のものにとくらべれば雲泥の相違がある。四天王にもまた悪魔を克服したというような努力奮闘の面貌はない。降魔の趣は正にこの如くあるべきものと思われる。力を以て服せられるのではなくて、魔の魔たる所以の根本が転ぜられるのである。換言すれば、悪魔の力は転じて四天王の力となり、菩薩の力となるのである。

十二月八日、暁の明星のかがやく頃、大覚に徹したと伝えられる菩薩成道の風光は、正にこの如くであつたと思われる。天に烟霧なく、風梢を動かさず、虚空の諸天香しき妙華を雨らし、多くの伎楽を作して菩薩を供養した、と伝えられる。妙華の雨ふるは適意柔軟の心があまねく大千世界をつつむ趣である。

成道の仏陀はやがて一切衆生の心想に入る、仏陀である。一切の世界を如実に知見する仏陀である。天眼を得て世間を観察し、無量の衆生を徹見すること、明鏡の中に自身の面像を観るが如しと伝えられるもの、即ちこれである。成道は如実相の知見であるが故に、地獄は地獄の如実の相を

長爪利牙なるは貪欲の積極的発動のすがたである。身体より烟焰を放つものは瞋恚の悪魔である。唇垂れて地に至るものはけだし愚痴の相である。蛇を身にまとうものは私えども私えども去り難き執念の煩惱である。空中に旋転するものは空虚な概念思想の魔に囚われしものである。是等の悪魔が菩薩を圍繞して、或は菩薩の身を裂こうとし、或は四方に烟起りて炎は天を衝き、或は狂風山谷を震動し、暗々として見ゆる所なく、四大海水は一時に湧沸し、魔衆の瞋恚はます／＼盛んになり、一切の毛孔より血を流すに至る、という過去現在因果経の敘述は、そのまま菩薩の心界の描写であり、善惡醜一切の上に煩惱魔の跳梁を観ずる菩薩の心境の直写である。

煩惱魔を観ずる菩薩は、やがて煩惱魔の統一に徹する。煩惱を転じて菩提を成するのである。魔王は菩薩の心の寂然不動なるを見て、心に慚愧し、憍慢を捨離し、すなわち道にかえり、天宮に還る。悪魔の姿は去つて天人の喜樂となる。喜樂が先に転じて苦惱となりたるもの、苦惱転じてまた喜樂となる。群魔の情意は沮悴してことごとく崩散し、また威武なく、諸の戦斗の具、林野に縦横に散乱する。やがて悪魔はことごとく転じて無上道の守護神となる。散乱する武器は再びとられて、道を守護する矛となり盾となるのである。

仏陀の前に現じ、餓鬼畜生はまたその如実の相を仏陀の前に現す。否、仏陀は地獄・餓鬼・畜生の貪瞋痴の姿を自己の生命裡に撰じてこれを知見し、これを根本的に融化するのである。それが仏陀にとっては他所事ではないのである。故に成道の仏陀は一切衆生、一切世間の苦惱を撰受して自己の苦惱とするのである。衆生はその仏陀の胸裡に安息の地を発見するのである。

衆生は何故に苦惱するのであるか。自己を如実の自己以上に評価するところに苦惱がある。傲慢はこれより起り、瞋恚もそこに起る。愚痴の煩惱がこれを然らしむるのである。自己を如実の価値以上に評価する他人の前においては、偽善が起り、価値以下に評価する他人の前においては、起り、瞋恚がおこる。唯自己を自己のありのままに評価する親の前においては、安樂であり、落ちつくことが出来る。今仏陀の成道はこの如き親の心を久遠のいのちにおいて開くのである。世界の衆生は成道の世尊の前において、その貪瞋痴の如実相を撰受せられ、そのありのままを知見せられ、久遠の親のいのちの中に安住して、その貪瞋痴の煩惱を融化せられて行く。そこに仏陀の成道の久遠の意義があり、そこに衆生の永遠の帰依処があるのである。

仏陀の成道の内面的風光を更に詳かに説かれたる十二因縁観は、そのままに衆生のすがたである。無明よりて行

り、次に識あり、名色あり、六入処そこに生じ、触起り、愛動く。愛はそこに深刻なすがたにおいて起り来り、取は有を生じ来る。生という現実はその成り立ち、老病死という悲痛はこれに続いて来る。根本の無明は三界に蠢動するいのちの盲目的な動きであり、老病死はむしろ衆生の不知不識の中に厳然として動き来るところの避くべからざる力あるもの、衆生はこれを覺せずして蠢動せるが故に、仏陀の成道はその衆生の姿を、久遠劫かけて撰取して行く内面的意義を有するのである。

此の如く大覚の仏陀は、今や内面的に一切衆生と接触するに至った。そこに仏陀の成道に即する久遠の黎明がある。それは暁光が永遠に続くのである。一切衆生の貪瞋痴の暗に仏陀の大覚の曙光が永劫かけて徹し来るのである。大覚の仏陀は大覚に固定せるものではなく、永劫かけて大覚し来るものである。一切衆生の煩惱の暗が無限に続くのに即して、仏陀大覚の黎明が無限に続くのである。衆生の暗そのものを照射してそこに久遠の黎明を現するものである。その久遠の黎明の照射を受くる衆生は、自己の如実相に目がさめたのである。仏陀の大覚は衆生の自覚の力となり、衆生は自己の姿をそのままに見るに至る。故に地獄の衆生は自己の貪欲の如実相を自覚し、畜生の衆生は自己の愚痴の如実相を自覚する。かくして一切衆生海は仏陀の根本大

## 念佛の信

「信心正因、称名報恩」ということが、余り型通りに受け取られて、信心信心といって念仏が二次的な事柄のようになると、信心そのものが無内容なものになってくると思われます。本願の生起本来とは、我らのために念仏の修行を成就したまうて、この至徳の尊号のみ名を廻施して下さる外にはありません。そのみ名を正しく頂戴することが信心であり、頂戴したみ名が私の口に迸るのが念仏ですから、信心を離れて念仏もなく、念仏を離れて信心もないと申すべきであります。

白井成允先生が、かつて『自照誌』（昭和三十七年七月号）に多田鼎先生の動転と廻心の記録を紹介された一文があります。その多田先生の記録に云く、「……自分は善悪の区別もつかぬ、正邪のわかまへもできぬ。如何にしてよいかわからぬ。その故にこのまま大悲にすがるより外はない。いふけれども、その大悲の仏、果していますのであろうか。仏いませぬというも、このささやかな凡夫の了見であり、

覚の光に照らされて、その如実相を現し来るに及んで、三千大千世界は仏陀の成道を讃美する響に充滿するのである。仏陀の成道後三七日の間、仏陀は法味を愛樂して菩提樹をめぐるかと伝えられる。それは一乗道の愛樂である。因果経にいう。

「我ここにありて一切の漏を尽し、作すべき所すでおわり、本願成満して甚深の法を得、見難きを能く見、知り難きを能く知る。その義微妙にして、唯仏と仏と能く之を知るあるのみ。若し他のために説くも彼解する能わずんば、我が法むなく授け、徒らに自ら疲勞して我が愁惱まさん。我独り寂靜処において、わが所見の法、安樂の境界を思惟して住せんかな」

この時、大梵天王が勸請して、仏陀をして転法輪の第一程に入らしめるといふことになる。即ち大覚の仏陀は決して説法を急がれぬ。衆生の機縁の成熟を待ち、その時までにはむしろ沈黙に住しようとする。ここに華嚴經出現の契機がある。華嚴經は仏陀の成道を主題として、大沈黙の大師子吼を敍するもの。まことに成道と教化との關係を徐々に述べ来るものである。降魔成道の沈黙裡に一切衆生海は響応して来る。久遠の静寂裡に充実せる生命こそは、やがて一切衆生の教化を永劫かけて果遂する大生命である。

（昭和十・十二・七日）

## 井上善右エ門

確かにいますというも、亦同じく凡夫の了見ではないか。理屈が立たねば安心出来ず、理屈が立つても矢張り安心出来ぬ。このまま私は死なねばならぬのか。また全く消滅に帰さねばならぬのか。如何してそれが堪えられよう。私は如何にすればよいのか。今死なねばならぬかも知れぬ。ここに一念の跳躍があるぞと、他の朋友は言うけれども、その跳躍さえ出来ぬこの身を如何がしたらよいか。ここに来つては御名を称えるより外はないぞと聞いておる、けれども何遍称えたどて、ただそれだけではないか、何の力にもならぬ。私は遂に祈った、祈っても何のしるしも見えぬ。私は思案に尽きて、身動きも出来ぬようになった。あるときは身に震動を覚えて来た。私は気狂になるのかなとも思つた。が、また意は転じて他に紛れて日を送っていた。然るに六月二十七日（大正三年）の朝であった。私はまた同じような苦に突当って居た時に、不図『我名を称えよ』との仰せに気がつきました（私でも南無阿弥陀仏と称えること

ができる)『我名を称えよ』この仰せを私は常に聞いて居たではないか。と思ひ浮べた時に御称名が口をついて現われしました。私の胸を鎖してをつた鉄のような暗黒の扉は、影もないように無くなってしまいました」

以上の記録を読みたどっていると、法然上人が黒谷の報恩蔵で、善導大師の『散善義』の「一心専念弥陀名号：順彼仏願故」の文に出合われ「：歡喜の余り聞く人なかりしかども、予が如き下機の行法は、阿弥陀仏の法蔵因位の昔、かねて定めおかるるをやと、高声に唱えて、感悦髓に徹り、落涙千行なりき」(十六門記)とある一段を彷彿せずにはおられません。このときまさに念仏は、南無阿弥陀仏を領受した信心であり、信心はそのまま念仏であります。信と念仏の前後はありません。『歎異抄』に「ただ念仏して：」と申され「弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて往生をば遂ぐるなりと信じて念仏まうさんとおもいたつころのおこるとき：」と語られているのも全く上述の念仏領受の端的を示された言葉です。

いづれの行も及び難き私に、ただ南無阿弥陀仏の御名をお与え下さった本願に感動せずにはおられません。その時、念仏はまさしく私の念仏となつて下さるのです。「本願名号正定業」が私の正定業となつて下さるのはただ信によるのですから「至心信樂願為因」は揺がぬお言葉です。「信

称名と信心と南無阿弥陀仏とが一つになつて働いて下さるところを聖人は『略文類』に「称名は即ち憶念(信)憶念は即ち念仏、念仏は則ち是れ南無阿弥陀仏なり」と申されました。念仏も信心も南無阿弥陀仏から流れ出て下さつたのです。その南無阿弥陀仏を「真如一実の功德の宝海」と示されているのをいただくとは何ともいえぬ尊さ有難さを覚えます。

凡夫の私どもの上に、念仏の信の感激はいつまでも続くものではありません。時が経過するうちに、なんともなくなる。なんともなくなるのは煩惱のいたすところ。それを『歎異抄』の第九条には「しかるに仏かねて知ろしめして煩惱具足の凡夫と迎せられたることなれば、他力の悲願は此の如きのわれらがためなりけりと知られて、いよいよ頼もしくおほゆるなり」と仰せられました。まことに無碍の一道の輝きが感じられます。念仏がものうくなれば、ものうくなつたで念仏申すべきです。有難くても有難くなくともお念仏申していると、仏徳がこの私を長養して下さいます。如来の行せしめたまうところを行じさせていたたくより外に、われ／＼が本当の人間として生きていく道はありません。まことに「ただ念仏して」であります。

念仏に育てられ、念仏に生かされ、念仏によって往生せしめられるのです。信心といつて何も特定の心があるので

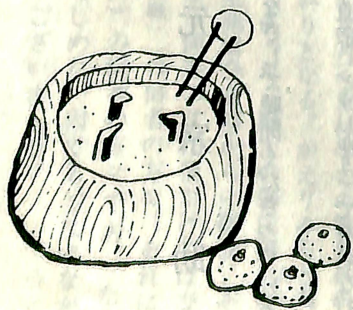
心正因」とはその事の外にはありません。信受した念仏は有難さの発露でありますから、その意を「称名報恩」と示されました。従つて信受の念仏が報恩の義を宿するのであつて、意識的に報恩の思ひを以て念仏申さねばならぬということではありません。『聞書』に蜂を殺して思はずお念仏申した、それを蓮如上人が「信の上は何ともあれ念仏申すは報恩の義と存すべし、皆仏恩になる」と申されている意をよく／＼頂戴すべきです。

私のために成就下さつた尊号を離れて信はありません。もし念仏から遊離した信があるというならば、その信は必ず観念化されたものとなるであります。実のない殻となるでしょう。本願を信じるとは名号を信じることです。誓願と名号とは一つであります。この点よく／＼『歎異抄』の第十一条をいただくべきです。云く「誓願の不思議によりて易くたもち、称え易き名号を案じ出したまいて、この名号を称えん者を迎えとらんと御約束あることなれば、まづ弥陀の大悲大願の不思議にたすけられまいらせて生死を出すべし、と信じて念仏申さるるも如来の御はからいなりと思へば、少しも自らの計いまじわらざる故に、本願に、相応して真実報土に往生するなり。……誓願と名号の不思議ひとつにしてさらに異なることなきなり」と確かに述べてあります。

はありません。「ただほれ／＼と弥陀の御恩の深重なること」を仰ぎまいらすより外にはありません。われらの心で作りに出したのでないものがわれらに与えられる。だから如来よりたまわたりたる信心であります。

決して念仏に酔うのではありません。ただ静かに広大無辺なる如来の徳に浮ばしめられるのです。かつて中井玄道先生の言葉として聞いたことがあります。「念仏を忘れるでない、信心は知恵の終極である。称名に自酔したり、告白に悲泣したりする姿は哀れである」と。各師各様に念仏の真実を伝えて下さっています。多くのよき師にお遇いしたことをよろこばずにはおられません。

(昭・五七年十月二十八日)



# 凡骨日誌抄

一期一会

西元宗助

て食い入るような熱心な目なざしで聴聞くださっている方の多いのに心うたれる。

この五箇山には、赤尾の道宗（どうしゅう）で有名な行徳寺をはじめ、真宗寺院が十三、四もある。しかし寺院といつても、現在でも行徳寺以外は「道場」というほうが、はるかにふさわしく、まだ現に道場といっている。

この皆蓮寺のご住職の酒井小一郎翁夫婦も、このお寺に住居しているのではなくて、近所に住んでいられるという。じじつ、この寺には庫裡はない、また所屬門徒も少数であつて、この五箇山のお寺さんは、ほとんど例外なく、なんらかの勤めについておられる。いずれにしても、生活のきびしさを反映し、「ご信心」について真剣でありなさる。なお、木村無相さんの、

わたしの信心  
雪ダルマ

この十月二十五日、富山県高岡市駅から特急バスに乗ること約一時間四十分、庄川の峡谷に沿うた秘境、五箇山に着く。すでに山々は紅葉し、その山のいただきは薄く雪におおわれ、点々として合掌造りの家も冬ごもりに忙しそう。例年より寒気が一週間早いという。わたしは前にも泊めていただいたことのある皆律の「よしの屋」に入る。石油ストーブに、電気ゴタツも用意して、温かく迎えてくださる。このたびは五箇山商工会の招待、その二十五周年を記念しての講演会の一つで、わたしは「大いなる命をたまわり」と題して、お話しさせていただく。商工会主催というのであるから、最初に通仏教的など観念していたところ、いや、ご信心のことをと、世話係から注文されたのは嬉しいことであつた。

それに、このような迎酬なところであるのに、会場の皆蓮寺には百名近くの村の方々があつまつてくださる。そして

おテントさま でありや

すぐとける

おテントさまが

ご信心

を、ご披露すると、みんながシーンとなつて、よろこんでくださった。まことに聴聞ということ、聞いたの、わかつたの、よろこんだの、はては何年何月に御信心いただいたという心得顔のわが「心中をひき破り、ひきやぶり」（道宗心得二十一ヶ条）していただくよろこびをいうのであらう。「されば、そくばくの業をもちける身にありけるを」という二種深信のよろこびをたまわることであること。なお、五箇山にて家からの電話により、東昇博士の急逝を知る。ひとごとではなく、哀悼、彼もついに大涅槃の浄土にいたつたのである。

十月三十一日（日）、洛西・浄住寺での一道会にお参りする。秋晴れの、ほんとうにうらかな、よい日であつた。浄住寺の山門のあたりのただすまいは、お浄土をこの世に映しているような、なんともいえない清らかな寂けさであつた。

私ども夫婦、山内の池山栄吉師の名號碑の前で合掌し、

同行の竹内さんや学生たちに、師の一心正念直来（オネガヒタカラスグキテオクヨ）の刻まれた御文字について説明する。

会場の客殿には、すでに多くの入々。山田幸博士（岡山大学理学部）のお姿も見える。しかし花田先生のお姿はない。（昨日退院されたと承る）榊原徳草老師も御齡、八十四いよいよ一期一会の想いが切実となつた。それだけに老師の、恒例の歎異抄拝読は切々として身に沁みるものがあつた。井上善右工門、山田幸両先生の感話も。

九月なかばごろから咲きつづけて、朝に夕に親しんできた秋の花も、いよいよ散り尽くしてお別れ、一抹の哀愁をおぼえる。また滋賀県伊香郡高月の双林寺での歎異抄の会も、この十一月でいよいよ終りととなる。かえりみると満七カ年、まことに有難いことであつた。願主の御住職川那部学師は、学生時代の京都学生親鸞会当時から御縁。そしてこの会の熱心なメンバーが、同寺のご門徒だけではなく、近隣の西源寺（故近角常観師住職）の信者の方々。それに滋賀県下の故稲垣瑞劔師（神戸）の信者の方々であつたことが、いっそう御縁を深からしめた一因であつた。ながながと、ほんとうにありがとうございます。

あるお寺の寺報に、(山本宗助の著)「教えは、聞けば聞くほど、自分が恥ずかしくなる。けれど、その中に嬉しさが宿っている」とある。とあった。ありがたいので、ここに誌しておく。この世にまたある雑誌に、曾我量深師のお言葉として、

「仏法を聞いて幸福になるといふことはありません。幸福など無用という人間にならせていただくのです」と。なるほど、心ひきしまった思いがする。

最後に、また敬愛する木村無相さんの詩を

### 一期一会

みんな

かなしく

なつかしく

なみあみだぶつ

(昭和五七・十一月二日稿了)

## 人間が人間になるために

人間ができてくるとは

さきごろ、朝日ゼミナールで「科学と宗教」について四時間ばかり話をしたときのことである。話のあとで「人間ができてくるとは」とはどういうことかと、私どものあいだで話題となった。

およそのことは常識で見当がつく。ことさら問題とするに足らないことである。ところが、常識に反して「なにか絶対のものをつかんでいるような人を、人間ができてくるといふのではないか」という手応えのある問題へ展開し、緊張したのである。

### 内省と思索のすすめ

人間が人間になる。それは、人間が人間存在のナゾを、その根源にさかのぼってたずねる、というこれまで考えてもみなかったことを問題にすることから始まる。

一切は「自己に始まって自己に終る」まず自己を根源的に知ることが、人間が人間になる先決条件である。さて自己

NHK大阪文化センター講座案内

大阪市梅田一ノ一ノ四(電話三四三三三八)

大阪駅前第四ビル二四F

わたしの歎異抄

講師 京都府立大学名誉教授 西元宗助

期間 一〇月―十二月、金曜、午前一〇時半―十三時

(来年三月まで)

月三回

十月一・二二・二九。

十一月五・一二・二六。

十二月十・一七・二四。

受講料 三ヶ月 ¥ 一二、六〇〇円

入会費 ¥ 五、〇〇〇円(三年間有効)

「弥陀の誓願不思議ニタスケラレマイラセテ」に始まる歎異抄は宗教書では聖書と肩を並べるベストセラ―の親鸞聖人語録です。

七〇年の人生をこの書に支えられて歩み続けてきた教育学者、西元宗助先生が「火宅無常の世に生きる喜びを皆さんに知ってもらいたい」と、自己の体験を交えてお話しになります。

(文化センター係記)

## 東

## 昇

を知ることがやさしいようで、なか／＼むずかしい。しかし、人はだれでも、自分のことは自分が一番よく知っていると思う。「自己」とは自己に最も近い存在」といわれるゆえんであろう。

また一方、人は自己中心の考え方、見方を脱しきれないから、自分だけの力では、自分を深くつかみ得ない。「自己」とは自己に最も遠い存在」といわれるゆえんであろう。

今の社会での生活の忙しさは、私たちから内省による知恵を奪ってしまった。知恵というものは、知識と違って、内省、思索によって深まる性質をもっている。今は、静かな思索の時間に乏しく、また思索の場も少い。家庭、職場を通じ物事のテンポの早さを追っかけるのに忙しいあまり、自分のことなどかまっておられない、という状況は否定できない。人は知恵を磨く方向を向いていないのである。内省の力の弱さは、人をして主義、綱領に従わせて個性を没却させる。人は豊かな物の中にいて精神的充足感の欠亡を



嘆く。世界と社会の激変のなかにあって、なお心豊かに安らぎと喜びをもって生きるには、一度自我を根こそぎむなしにして、自己を克服するほかあるまい。人はどのようにして、自己を克服して真の自己に到達しうるか。

### 精神的実在者

今年の初め、京都はゴヤ展でにぎわった。近代美術のパイオニアといわれるゴヤ（一七四六—一八二八）人間存在のナゾに立向い、人間をその根源において追求した作品のもつものすごい迫力、人間の深淵の異様さを画いて雄渾さを感じさせる絵の前に立ってドキッとしなかつた人はあるまい。絵がわかる、わからないの問題ではない。なぜか。いつわりの世界の暗黒面を探索したゴヤは、現世の取るに足らない虚栄に憂身をやつす人間、の混沌たる姿をあからさまに描いた。人間のだらしなき、うぬぼれ、色欲、自己欺瞞など人間精神の暗黒面を鮮烈に、大胆に徹底的にえぐり出し、人間である故の、人間存在そのもののナゾからくる人間の不安をさらけだしているからに違いない。

ゴヤの版画「カブリチオス—気まぐれ」のひとつに「これも自分が何ものかわからない」というのがあつた。この版画に次のような辛らつな説明がついている。「この世は仮装舞踏会のようなもの。顔、衣装、音声、すべてがいつわ

精神的実在との呼応——救い——にいたるまで徹しなければならぬ。ここにおいて、人間の存在が基礎づけられる。

精神的実在とのかわり、人間の側でつくつたものごとくであるが、実は決してそうではない。そも／＼人間は例外なく、初めから、根源的に、無条件に、精神的実在のなかにある存在である。人がそれを受容しようが、すまいが事実そうなのである。したがって、この関係はゆるぐことなく、くずれることのない無条件の永遠の絶対関係である。頭で、言葉で考えるのではない。はだで受け止める実感である。

精神的実在者より人間への絶対無償の行為（無限の慈悲、あるいは愛）に人間が目を開くとき、そのときこそ、人は他にもたれかかることなく、自分自身で立つ真の独立者としての資格を得る。こうして人は、真の自己に到達したといえよう。真の自己発見、人間は真に人間になるのである。

### 絶望と無縁に

現代はきやびやかで虚飾に満ちている。物が幅をきかしている。人は利を追うことにのみ汲々としている。こんなときに、物だけを、そして頼りにならない人間だけを頼りにして生きると、自分の支えになるものは何もない。

しかし真の独立者に立ち帰った人は、今日のような渾世虚飾の世、物質の世でも、自己内外のいかにかわりな

りである。だれもが、自分とは違った姿をしたがる。みんな嘘のかたまりで、自分が何ものであるかさえわからないのだ」（巨匠の世界、ゴヤ・タイム・ライフ）

人間にはいろんな不安がつきまとっている。富の不安、地位の不安、権力の不安、恋の不安、そして死の不安等である。不安のなかに深くはいつて行つて、人間を超えた絶対なるもの（究極的精神的実在）にふれる。この絶対なるものに座をもつた心、それを不動の心といつてよい。この不動心を身につけることこそ、人間が人間になるための通路である。

究極的精神的実在は、人間にとって切つても切れない絶対的關係として無条件に事実存在する。人間はこのような關係のもとに、意識の有無を問わず、一切の資格を問わず、生かされて生きていく。

このことの実態は、地獄に落ちるのが当然（地獄は一定すみかぞかし）という自己放棄の果てに、自我の空しくされたところにわき出る。人生のさまざま、人的物的異変を通して、自己の卑小にぶつかつて納得できるところのものである。

ゴヤの傑作を見て、人間の不安、醜さにおののくだけで終りとするのはできない。不安や醜さがまんできなくなつて、不安や醜さの根ざすところを突き破つて、ついに

く、絶望することはない。人間はどんな時でも、本来生きられるようになっていくのである。

（朝日新聞 昭和四十七年十二月六日）

### 人のために、そして自分のために

人の一生は、人間關係の処理の集積のようなものだが、世の中の仕組みが複雑多様になるにつれて、人間關係はだんだん陰湿になってくる。近代化とは、人間關係の稀薄になりゆくことだと言つた人がいるが、なるほどなと思う。

### 不信と疑念の時代

親身になつて心から話せる相手にめぐりあえず、一人暮しをしているのが視代人ではないか。相手の身になりきつて話のできる人になると、そうたやすくは見つかからない。この人はと思うほどの人にはなかく、出会わない。

人は他人に対する不信を基礎として、ようやく生きていく。他の存在を認めようとせず、他を排斥し、機会があれば人間があつたけなく消されてしまふ。今日のように不信と猜疑とにみちた時代は、かつてなかつたのではないか。人と人との間は、まことに冷たく非情である。

いつか感動して読んだサン・テグジュペリ（一九〇〇—一九四四）の「星の王子さま」を内藤濯（仏文学者）の名訳

で、また読みかえし、感激を新たにした。  
「親身になって話をする相手が見つからずに一人きりで暮らしてきた」王子が、砂漠で会った狐につぶやく。「ぼく、友だちさがしているんだよ」そして、かの王子（作者）はいう。「ぼくたち子供は、物その物、事その事を大切にす。」「物その物、事その事を大切にすると、云いかえれば、相手の身になることである。自他のけじめを超えて対象と一になることである」と訳者は解説する。

星の王子さまはつぶやく「ぼくに滑稽に見えない人といったら、あの人きりだ。それはあの人が、自分のためではなく、人のためを考えているからだ」と。  
サン・テグジュペリは「ある將軍への手紙」の中にこう書いた（一九四三年）。「ぼくは一生懸命ぼくの時代を憎む。今この時代では、人間は喉が渇いて死にかけている。人間が人間としての芯を失ってしまっている。それがぼくは悲しいのだ」  
著作の背後に、いつも生と死の間の抜きさしならぬ感覚が、いわばしづきをあげていた。仏軍航空士官だった作家、この世をもっと息苦しくないものに、と、おとな向きの美しい童話をかいたこの短命の作家の心は、新鮮な驚きをよびおこし、深き内省へとかりたてる。今も各国でサン・テグジュペリは、永遠の古典ともいふべき、星の王子さま

彼と一つになって彼を理解する。その時彼は私の、私は彼の心の奥深いところで結び合う。彼の悲しみは私の悲しみであり、彼の喜びは私の喜びである。

芸術や学問においても、二流の制作は、自己の拡張であるが、一流の創造的製作は、自己放棄である（シモース・ツエーリ）

### 真の自己創造への道

人は自分を空しうしてこそ初めて自分になれる。まず、相手のために生き得て、はじめて自分のために生きる。自己を放棄して真の自己創造への道が拓ける。それは通常の価値判断の逆転により新しく開けてくる新しい価値の世界である。これなくしては、現代は現代を超越できない。

「我ニ有ルモノ我ガモノニ非ズ、モノヲ施シ終ツテ我ガモノナリ」（十住毘婆娑論）

（中日新聞 昭和四十七年七月九日）



の出版（一九四一）、その驚異的成功を知ることなく四十歳の若さで他界した。山崎庸一郎著「サン・テグジュペリの生涯」は、この作家の人生をいき／＼と伝えている。

### 無私の心をもって

さて、相手の身になるとはどういうことか。自分が自分にとり中心でなくなるのだ。自分を空しくして相手に対することだ。無私の心が、その人の中心の座を占めることだといってよいと思う。

これとは全く反対に、相手の上に自分を拡大せんとする、自己中心的自己主張の立場では、争うという人間の野生的本能がむきだしになる。人は、平和を説きつゝ争うという本性をもち、人は平等を説きながら差別を好む本心をもっている。

自分本位に自分中心にものを考える。これでは、実はほんとうに考えたことにはなるまい。人は自分を大切にす。しかし、大切にすればするほど本当の生命はどこかへいつてしまふ。相手を大切にす、相手本位に考えてこそはじめてほんとうに考えたことになるのではないか。ここにおいて、はじめて他を大切にす、そして自分を大切にすることのできるのだ。

相手中心の立場は、相手を外からでなく、自分を空しうし相手を内から理解する。彼の心の中に深くとびこんで、

### ゲエテの言葉

誰でもまた何時でも、自分の確く信じて居ることを実行する力は常に持っているものだ。

天才の仕事に反対をする者は燃えている石炭をたたくようなものだ。消すどころか、火花が八方に散ってとんでもないところからも燃えはじめる。

誤謬は絶えず繰返して世に行われている。その故に人は飽くことなく真理を繰返して聞かねばならぬ。

めい／＼に、一体自分とは何かということを知るには、内観したって駄目だ。ただ実行せよ。つとめて自分の義務を行えば、直ちに自分の天職を知る。（義務とは即ち毎日の仕事の外にない）

迷信は人間の本性の一部である。それゆえ人が自分の迷信を全く一掃したと思つた時でも、実はどこか妙を隅っこに隠れているので、もう大抵出ても大丈夫と見込みがつく時分に再び首を出して来るものだ。

念仏詩抄

自信さえあればよい

ある人香師に 香師 香樹院徳龍師

「おそれながら自信教人信のことわりを

お聞かせ下されたし」

と申されたれば

香師にわかにかえたま

「ナニ 自信教人信のいわれが聞きたい

自信さえあればよい

その信がたやすく獲られる信ではないぞよ

教人信はいらぬ

汝如き者に教人信は全く傲慢心となるぞ

庄松同行いわく

「オレが喜ぶとヒトがそれを

ひろうて喜んでくれる

自信だけあればよい

わかれかき

信だけあればよい

ひたひたと

向うさまから

ひたひたと

うちとけきつて

くださるゆえか

ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ

木 無 相

ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ

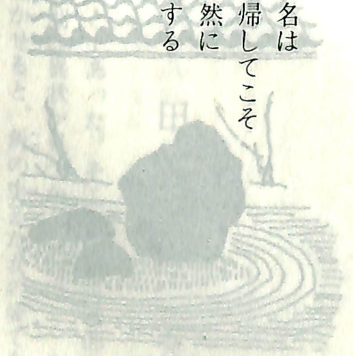
ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ



そのこの者が

香師おおせに

「まことに悪性は

凡夫の自性なれば

やめようとて

やめられはせぬ

ホトケ

この者を助けたまう

と

と

と

と

と

と

ホトケ  
この者を助けたまう  
と

そのこの者とは  
このわたし  
ナムアミダブツ  
ナムアミダブツ  
ナムアミダブツ  
ナムアミダブツ  
ナムアミダブツ

生きたご信心

香師おおせに  
「聴問したオイワレが  
おぼえられたか  
おぼえられぬかを  
吟味（ぎんみ）するに  
およばぬ——  
おぼえた  
おぼえぬが

大無量寿経に聞く(四)

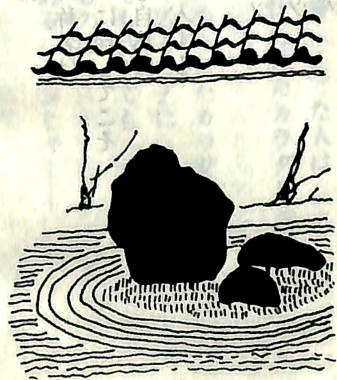
五、聞即信——信即行

この経の下巻に衆生の往生成仏させていただくかなめを  
「十方恒沙の諸仏如来、皆共に無量寿仏の威神功德不可  
思議なるを讃歎したまう。諸有の衆生、其の名号を聞き  
て、信心歡喜し、乃至一念せん、至心に廻向したまえり。  
彼の国に生れんと願すれば、即ち往生を得、不退転に住  
せん。ただ五逆と正法を誹謗せんとをば除く」  
とある。我等は煩惱に眼を障えられて、お念仏を聞いても、  
お浄土と聞いても、一向に驚けず、自分に関係のないこと  
と聞き流してしまっている。ここに十方の諸仏が口を揃え  
られて、無量寿仏の不可思議な御徳を讃歎して、お知らせ  
下さるのである。  
点滴の岩を穿つように、繰り返しされる諸仏のお育てで、  
弥陀仏の御本意をお知らせ下さるのである。このことにつ  
いて、かつて申し上げたが、九大の心療内科の放送があつ  
た。子供が歩けなくなつて種々のお医者にかかったが、何

信でない  
わかつた  
わからぬが

信でない  
それ知らして  
下さるが  
生きた御信心

ナムアミダブツ  
ナムアミダブツ  
ナムアミダブツ  
ナムアミダブツ  
ナムアミダブツ



花田正夫

処も悪くないとのことであつた。そこで九大医学部で診察  
をうけた。どこにも別に異状が見つからないので、この子  
にお母さんの絵を描かせると、角の生えた女の姿であつた。  
そこでその母に生れた時からの様子をきくと、はじめは普  
通の子と何等かわりはなかつたが、次の子が弱かつたので、  
それにかかりはてているうちに立ちあがらなくなつたとの  
ことであつた。医師はそれにヒントを得て、幼い子が母に  
抱いて貰いたいのには、弟にばかりかかつて自分がかまつて  
貰えないので、抱いて貰いたいばかりに立ち上がらない  
でいるうちに、筋肉が弱つたことが判つた。それから毎日  
看護婦にマッサージをさせながら「Sちゃん病氣じやな  
いの。歩くことを早く思い出して、やさしいお母さんのと  
ころへ行きましょう」の一句を歌のように繰り返し、子供  
が聞いていようが、居眠りしていようがおかまいなしに続  
けていると、一週間も経つた時、子供が手擡りを掴まえて

（注）彼女の親もよむとせむと

立ちあがろうとするようになった。ほどなく歩きはじめたので親をよぶと「お母さん」と呼びながらその懐に飛びこみで行った。意気は味もせずさるのつゝある。このころこの放送を聞きながら、この子こそ私が自分の煩惱に縛られて身動き出来なくなっているのを憐まれて、諸仏が絶え間なしに呼び続けて下さり、ことばが身につき、お念仏が出来ることを知らされ感無量であった。諸仏の口を離さずお念仏を聞き、一向に親を離れず、自分も親の心にならぬ。釈迦・弥陀は慈悲の父母種々に善巧方便し、聞かすも、サわれらが無上の信心を發起せしめたまいけり。五濁悪時悪世界、濁悪邪見の衆生には、一向に親を離れず、弥陀の名号あたえて恒沙の諸仏すすめたるを聞き聞かす。この浮かぶ瀬のない衆生のために選びにえらばらた名号であったと聞き、ああ有難いと信ずる一念に、摂取不捨のめぐみをいただいで、間違ひなく浄土に生れる身とさせて下さるのである。そこに、聞いたまんまが、お念仏とあらわれ、それを堺として浄土への白道が開けるのである。これは、仏願力の自然の催しで、自力のはからいの難らぬ世界である。大無量表證の聞かす。歎異抄には「すべてよろずの事につけて、往生には賢き

見下げていることに気づき、

限りなき歎異の涙唯円のころもしらで五十路すぎゆ

と、思わず叫んだ。歎異抄の十二章にこのことを詳しく述べてある。こうしたことによって、本抄の十一章から十八章までの「異なることをわがごととして悲歎して下さる、唯円大徳の慚愧の声」に驚いたのである。

それは単なる相対差別の善悪沙汰ではない。「慚愧とは、自ら罪を作らず、他を教えて作さしめず、内に自ら羞恥し、発露して人に向う、人に羞じ、天に羞す。慚愧無き者は人と為さず、畜生と為す。慚愧あるが故に、則ち能く父母・師長を恭敬す、父母・兄弟・姉妹あることを知る」と説かれている。

しかも聖人は、愚禿悲歎述懐和讃に

無慚無愧のこの身にてまことの心はなければども

弥陀の廻向の御名なれば 功德は十方にみちたまふ

と、述べられている。浄土真宗に帰して、他力の信心を喜んでいられるけれど、虚仮不実の心ばかりで、それを慚愧する心もない身であるが、この身にたまわる弥陀廻向の御名のお蔭で、我身ばかりでなく、十方三世にわたって功德が

思いを具せずしてただほれ／＼と弥陀の御思の深重なること常におもい出しまいらすべし、しかれば念仏申され候、これ自然なり、わがはからわざるを自然とは申すなり」と云われている。六、唯除五逆、誹謗正法。王本願と云われる十八願に、五逆の者、法を謗る者は除くとあるについて、昔の講者は、これは釈尊の抑止である、こうしたひどいことをする者をおさえてとどめたいためであると云われている。福島先生は、五逆、謗法の罪を犯す者も、自分ではそうと気付かぬが、釈尊がこう云って下さることによって、成程自分がその通りであると知らされる、と味っていられる。この仰せがないと、本願に甘えて、悪無碍の邪見におちることを御心配下さるのである。その罪の重いことを知らせて、これを何処までも非憐して下さることも知らされるというものである。

みちて下さるとの讃仰である。

聖人は「愚禿の心は、内は愚にして外は賢なり」と、愚者の故に愚者とも思えぬ身と仰言るように、慚愧の心もない身であると告白して下さるのである、狂人が病識のないのと同じと仰言ることによって、そうした我身に他力の悲願のましますことを知らされるのである。

み法の旅

那須行英

生も死も仏と共に法の旅

やれ勿体なや 南無阿弥陀仏

うろ／＼と迷いかさねしわが前に

六字の親が それ今ここに

聞き心 信じ心もはらわれて

丸の裸で 弥陀のふところ

昭五七・六・十七日

あとがき

師走に入りました御忙しいことと存じます。来る年もよろしくと、御挨拶申し上げます。

十二月は近角先生の浄土へ還えられた月であります。先生が生涯かけておすめ下さいました信仰問題を頂きました。また十二月は釈尊の成道の月とて、福島先生の降魔成道の文をいただきました。禪家では臘八の接心をはげまれることでありましょう。

念仏の信を井上様から頂きました。先月は御姉上様九十一歳で亡くなりましたので、旧稿を頂きましたが、今月はお忙しい中を執筆頂きました。

西元様の凡骨日誌抄には、赤尾道宗ゆかりの地での法縁、更に京都一道会の模様、また有難いことばや詩をお紹介下さいました。なおNHKの大阪文化センターで十月十一月十二月と御出講のことを御紹介させて頂きました。

次に、東昇様は、七十で急逝、大きなシヨックをうけました。(京大医学部名誉教授)宗教のことばは「古くならない新しさがある」と云われたことも思い出し、池山先生に師事されて、京都学生親鸞会のお世話をいただきました。思出はパノラマの様に点滅してやみません。お念仏の中に俱会一処の仏の御誓い

を仰いでおります。お別れに際し、旧著の中から二篇を転載させて頂きました。浄土から御照覧下さるでしょう。木村様は、香樹院の仰せを一応今月で終り、一月から歎異抄の念仏詩を書いて下さる由であります。今年の寒さもお障りありませんように。

私事入院、退院、また入院をくりかえしながら一年の療養をさせて頂きました。その間、表に裏に海山のお心配をいただきお礼のこともありません、お念仏裡に深謝しております。今後も再発をいつも見護っていただきながら一日一日を大切にすごさせて頂きます。正月には七十九歳になり、法然聖人、お釈迦様のお年も近づきました、これ全く「恵まれて生かされた」のであります。愚痴一束申し上げて、歳末の辞とさせて頂きました。

御案内

十二月十二(日)  
午後一時半  
鬼頭氏宅で  
例会を催します。

定 価	半 年 八〇〇円(送共)
	一 年 一六〇〇円(送共)
編 集	名古屋市南区駈上町 二ノ八八
電 話	花 田 正 夫
電 話	八二一局七〇三七番
電 話	愛知県西加茂郡三好町大字福谷
電 話	坂 部 光 雄
電 話	名古屋市南区駈上町 二ノ八八
電 話	振替口座 名古屋六二〇四七〇番
電 話	郵便番号 四 五 七
電 話	慈 光 社